Queen of Sorrow

Unofficial Original Side Story of “JOJO”

S.Joester moves in Mysterious Ways #05

Written by ITOKENCAN

2014/12

§ §

暗い山道をジョジョはひとりで歩いていた。
かじかむ爪先を地面に突き刺すようにして、ゆっくりと目的地へと向かっていた。
『守屋毬子』が『スタンド使い』になるきっかけとなった『祠』。
「あの場所に何があるって言うの」
ジョジョには何が待ち受けているのかさっぱりわからなかったが、決して楽しいことではないのだろうとため息をついた。
「やれやれだわ…」

目の前には、いつかアビーから聞いた祠の情景とはまったく一致しないモノがあった。
不格好なコンクリートの壁があり、中央に重たそうな鉄扉がはめ込まれている。
「本当にここなの？」
そう言いながらも、そこが目的地であることをジョジョは確信していた。
「ほんと、やれやれだわ」
ジョジョは鉄扉にぽっかりと開けられた拳大の穴を見ながら言った。
「まさか『円谷スミレ』まで来ているなんて」
穴の縁はダリの絵のようにだらしなく溶かされている。
じっと耳をすまし、中の音を聞いた。
アビーは僅か数歩の奥行きしかないと言っていたが、穴から覗いた先には数歩どころではない距離の暗闇があった。
「保坂さんを待つか…ひとりで行くか」
ジョジョは深呼吸をし、目をつむった。
ゆっくりと扉を開け暗闇に足を踏み入れると、ジョジョは『スタンド』を使って姿を消した。

猫のように足音を立てず、少しずつ進む。コンクリートで固められていたのは入り口だけで、湿り気を帯びた土と石の壁が続いている。その壁には削岩機の跡がそのまま残されている。
そこはもうアビーが言っていた『祠』などではなかった。
僅かに空間の広がりを感じる。
――ここが棺みたいな石の箱があった場所ね。
暗闇に慣れた視界に、即席で作られたのだろう階段が見えた。
――せっかく山を登って来たのに、また降りるなんて。
階段を下りた先は、やっと人がすれ違えるほどの幅があった。そして随分と距離を置き

常夜灯が設置されていた。
――まさか、あの坑道と繋げたの？
そのまさかだった。なぜかＳＰＷ財団は、高校の体育館下から見つかった坑道と『祠』を同時に調査していた。
その調査の目的は誰にもわからない。その調査も完了しているのかまだ継続しているのか、薄暗い穴の中には何の情報も落ちてはいなかった。
一歩一歩、慎重に足を進めるジョジョの体が冷えてくる。緊張のせいで筋肉もこわばり、時折吹く僅かな風で鳥肌がたつ。
――やれやれだわ。
この奥に必ず『守屋毬子』と『円谷スミレ』いる。
どうしてこの場所に『守屋』がやって来たのかはわからない。『円谷スミレ』の祖母（のスタンド『ラヂヲ・ヘッド』）は、その理由を言わなかった。ただ一つ気になるのは、『ラヂヲ・ヘッド』はこの場所の『力に導かれる運命にある…私も含めてね』と言ったことだった。
――あの人（ラヂヲ・ヘッド）も含めて…
ジョジョは『因縁』という言葉を思い浮かべる。
赤子の自分を拾い育ててくれた『ジョセフ・ジョースター』から聞いた、『ジョースター家』の歴史は『因縁』そのものだった。
血は繋がっていなくとも、自分の名前に刻まれた『静・ジョースター』の重みは、勇気を呼び起こす。
『祠』から繋がる坑道を透明になって進むジョジョの体から、僅かに青い光の粉が舞った。

――誰かが来る！
坑道の先から足音が聞こえた。音を隠すことなく、全力で走って来る。
ジョジョは息をひそめ、その足音を聞いた。
先の常夜灯の元に人の姿が浮かび上がる。
――円谷スミレ？
透明のままやり過ごそうか、姿を現しスミレを呼び止めようかジョジョは迷った。
どんどんスミレは近づいて来る。ジョジョは背筋を伸ばし、壁に張り付くようにして息を止めた。
全力で走って来るスミレの顔に巻かれた眼帯を見止め、ジョジョは困惑した。目が見えないのに全力で走って来る。
さらにジョジョが困惑したのは、自分の姿は透明になって見えないはずなのにスミレがジョジョの腕を掴んだことだった。
そして、聞こえないほどの声で、しかし力強く「あなたも逃げて」と言った。

ジョジョに決断させる時間も与えず、スミレが力いっぱい腕を引っ張る。
「何？」
「静かにして…とにかく逃げて！」
静かにしろと言われても、走り出した足音は消すことができない。
ジョジョはスミレに訊きたいことが山ほどあった。
「あなた…」
声で気が付いたのか、スミレは一緒に逃げているのがジョジョだと気が付いたようだった。しかし、それを確認する前に、二人の背中へ声がかけられた。
「他に誰かいるの？」
折れ曲がった坑道の奥から『守屋毬子』の声が聞こえた。
その質問にはどちらも応えず、ジョジョとスミレは走り続ける。
「待ちなさいよ…どうしたの？」
声色は落ち着いていたが、どこか高圧的な雰囲気も感じられた。
「どこまで逃げるの？」
ジョジョは小声で訊いた。
「わからない…とにかく逃げるの！」
二人の走る速度は遅くないどころか、スミレの年齢を考えれば速いと言っても良い。
しかし『守屋毬子』のスタンド『スムース・オペレーター』に走る速度など関係が無かった。足裏の摩擦を失くし、壁に手を掛けると、アイススケーターのように全身を前へと推し進めた。最初は3、4メートルごとに左右交互の壁へ手をつきジグザグに進み、速度が増すにつれて距離を伸ばしていった。
ジョジョとスミレの姿を視界に捉えるまで時間はかからなかった。
「早く昇って！」
スミレがジョジョの背中を押し階段を駆け上がるように指示した瞬間、スミレの肩には守屋毬子の手が乗せられていた。
「どうして逃げるの？」
スミレは振り返らずにその手を跳ね退けると、大きく足を踏み出した。
守屋はゆっくりと階段を昇り始める。
ジョジョが雪の降る外へと出て振り返ると、すぐにスミレの姿が見えた。
「どういうことなの？」
ジョジョは息を整えながらスミレに訊いた。
「わからない…わからないけど、守屋さんがおかしいの」
「おかしいのは前からでしょ」
「違うの…何か違うの…おかしなことをされたのよ」
「されたって、誰に？」

「奥にいた…何かしたのよ！守屋さんにッ！」
二人はコンクリートに固められた入り口を見ながら後退している。守屋が急いで追いかけてこないことが逆に恐ろしかった。
「何を話しているの？」
守屋の姿は見えないが、近づいて来ているのがわかる。
ジョジョはスミレに触れるとお互いの姿を消し去り、木の影に隠れた。
「雪が降ってるじゃない」
守屋が鉄扉から外に出た。ぐるりと周りを見渡し、積もり始めた雪の中から足跡を見つける。
「とても気分が良い…」
守屋はその場で背伸びをし、深呼吸をしている。
どこか今までの守屋と雰囲気が違った。これが太陽の光の下であれば、すがすがしさを感じさせるような、健康的な姿だった。
守屋は左手を首に添え、コリをほぐすように首を曲げた。
「そこにいるのはわかってるから」
どこを見るでもなく、守屋はジョジョとスミレに声を掛ける。
「私はいま、とても気持ちが良いの…これが絶好調って奴かしら？」
守屋は髪に積もり始めた雪を払いのけ、うっすらと笑って見せた。
ジョジョは目を疑った。
「まさか…」
再び『因縁』という言葉が脳裏に浮かぶ。
ジョジョの緊張がスミレにも伝わるが、スミレは守屋に感じる違和の原因をわからないでいた。
「確かに…おかしいわね」
ジョジョは小声で言った。
「さっきから、人のことを『おかしい』『おかしい』って失礼じゃない？」
守屋は語気を強める。守屋の場所まで聞こえる声量ではないはずなのに、しっかりと聞こえているようだった。
その時、ジョジョの視界に動くものが見えた。
保坂が獣道を抜け、こちらにやって来ている。
――まずい…
しかし、保坂に「来るな」と言える状況ではなかった。
――まだ守屋は気付いていないッ！
「守屋ぁッ！」
ジョジョは大声で守屋を呼び、木の陰から姿を現した。

守屋はゆっくりとジョジョの方を向き「そんな大声出さなくても、そこにいるのは知ってたわよ」
保坂はすぐに状況を飲み込み、守屋に気付かれる前に立ち止まった。
「あんたまさか…」
ジョジョは脳裡に巡る最悪の事態を考えながら訊いた。
「あんた、何をされたの？」
守屋は笑っている。
その口の端に鋭く尖った歯が見えた。
「その穴の奥で、誰に何をされたの？」
ジョジョは『ＳＰＷ財団』が調査している現実と、義父の『ジョセフ・ジョースター』から聞いた『戦いの記憶』と、自らの名前に刻まれた『ジョースター家』の『因縁』に思いを巡らせていた。
「生まれ変わったのよ」
守屋が笑いながら言った。
「何かを被せられたの」
ジョジョの背後からスミレが叫んだ。
「よく見えなかったけど…穴の先に人がいて…守屋さんの顔に何か被せたのよ。それから守屋さんが動かなくなって近づこうとしたら、守屋さんの体温が急激に冷えたの…それでも動き出して、怖くて…怖くなって」
ジョジョは眼帯をしたままのスミレの言葉が信じられなかった。どうやって『見た』のかを訊きたかったが、守屋がそれを許さなかった。
「スミレさんもこっちに来れば？」
「駄目…」
まるで子供のようにスミレは首を振った。
「私がいなきゃ、生きていけないんじゃないの？」
スミレの心を逆なでする声だった。
「なんで…なんでここに『石仮面』があるのよッ！」
ジョジョが叫んだ。
その背後からゆっくりと『アクトン・ベイビー』が現れる。
「…戦う気なの？」
守屋はまた笑っている。
「私はもういいのよ。言ったでしょ、生まれ変わったって。もうあんたたちのことなんてどうでも良いの」
「そうはいかないのよ」
ジョジョがじっと守屋を見据える。

「あんたには関係なくともね、こっちには用があるのよ」
「しつこいのは嫌い」
守屋は歩き出した。
「スミレさん…さぁ、一緒に」
ジョジョは、横を通り過ぎようとした守屋の肩を掴んだ。
「待ちなさいよ」
「気安く触るなッ！」
一瞬にして『S・オペレーター』を身に纏った守屋がジョジョに拳を上げた。ジョジョもそれに合わせて『アクトン・B』の拳を握る。
中空で衝突した拳から青い光が弾ける。
「どうしてもって言うなら、相手してあげるわ」
守屋が身構えた。
「負ける気がしないの。自分でもわかるほど力が漲ってるの。この力をあんたで試してみるわ」
「あらそう…でもね、相手を間違えてるわ」
ジョジョの言葉が終わる前に、守屋の足許に白い影が走る。
「ほんと、頼りになるわ」
雪に紛れるように保坂の『ホワイト・ストライプ』が守屋の両脚を縛りつける。
「こんなもの！」
周囲の雪を巻き込むように、守屋は右腕で『W・ストライプ』の帯を掬い取った。
屈みこむ体勢となった守屋をさらに別の『スタンド』が襲う。
「まさか…スミレさんまで」
『ハルカリ』の熱い拳がスミレの背中を直撃した。
地面に倒れ込むのをなんとか堪え、守屋は『W・ストライプ』の帯を掴んだままジョジョに殴りかかった。
大きく振りかぶった右腕の肘に、ジョジョの『アクトン・B』がアッパーを決める。
再びよろめいた守屋へ、追い打ちを掛けるように『ハルカリ』が顔面めがけて右ストレートを放った。
その時のスミレに躊躇いはなかった。思い切り熱くした『ハルカリ』の拳が触れれば、焼け爛れるのは間違いない。その拳を守屋に叩き込むなど、つい数分前なら絶対にしなかった。
しかし、いまは違う。スミレの目にはもう以前の守屋の姿はない。
先ほど背中に叩き込んだ拳も、十分に守屋の肉体を溶かしたはずだった。それが、たった数秒の間に皮膚が再生している。その異様な光景が、守屋の顔面に拳を叩きこむことの躊躇いを消し去った。

「絶好調って言う割には、たいしたことないんじゃない？」
ジョジョが煽るように守屋へ声を掛けた。
その言葉を受けて、守屋が顔を上げる。
顔面の左半分が焼け爛れている。
「痛くないわ…」
守屋の眼が笑っている。
ジョジョは守屋へと一歩踏み込み、右腕に掴まれたままの『W・ストライプ』の帯を奪い去り走り出した。
「早く！」
ジョジョはスミレへ声を掛ける。
「どうするの？」
ジョジョに訊いたのは保坂だった。ジョジョとスミレが走り出すのを見て保坂も一緒に走り出した。
「逃げるのよ！」
保坂にはジョジョの言葉が信じられなかった。
「なんで逃げるの！」
保坂の質問にジョジョは応えなかった。
「なんで奥へ逃げるの？」
スミレが訊いた。
『二ツ杜トンネル』のある方ではなく、ジョジョは山の斜面を登るように逃げている。これまで戦っていた場所から上へ向かうような道はなく、ジョジョたちは樹木の隙間を縫いながら逃げていた。
「あんなものを街に出しちゃいけないの」
ジョジョは、守屋が追いかけてくるだろうと考えていた。
――まだ守屋は自分の力を試してはいない。「絶好調」と言った力を試したいはず。
ジョジョは右前方を指さし、一緒に走っている二人を誘導した。
ジョジョが屈みこんだ場所は、山の傾斜が僅かに窪み平らになっていた。
『アクトン・B』が保坂とスミレに触れ、三人は透明になる。
『ハルカリ』がジョジョと保坂の背中に触れ温めた。
「ありがとう」
保坂は姿の見えないスミレにお礼を言った。
「ところで…どうして目が見えないのに…見えるの？」
ジョジョはスミレに訊いた。
「熱を感知できるのよ…」
「サーモグラフィーみたいな感じ？」

「そうね。もう少し輪郭がはっきり見える感じ…ところで、守屋さんは…」
スミレはジョジョに訊いた。
「『石仮面』ってなに？」
スミレはジョジョが叫んだ言葉を覚えていた。
「話すと長くなるわ…簡単に言えば『石仮面』ってのは『吸血鬼』を作り出す仮面のこと。あの坑道の奥に誰がいて、なんで『石仮面』を持ってるのか分からないけど、とにかく守屋は『石仮面』を被って『吸血鬼』になった…と思う」
「ちょっと待って。『吸血鬼』って…おとぎ話じゃないんだから」
保坂が疑うように言った。
「『スタンドの世界』に生きてる人間なら、『吸血鬼』くらい信じなさいよ。『スタンド』よりよっぽど身近なお話じゃない」
「でも…」
「『吸血鬼』ってのは、倒せないの？」
スミレが訊く。
「倒せないわけじゃないわ…実際に、私の父や、曾祖父は吸血鬼と戦って勝ってる」
「じゃあどうして逃げるの？」
「私は父でも、曾祖父でもないからよ」
「『吸血鬼』になると何が変わるの？」
「あなたたち、質問ばかりね…まぁ、この状況じゃ仕方ないけど」
ジョジョは深呼吸をして話を続けた。
「語弊があるけど「不老不死」に近いものになる。食事は人の血。肉体はまさに超人的な力を持ち、さっきも見たと思うけど、再生能力もある」
「弱点は？」
「太陽の光」
「本当に『吸血鬼』なのね」
「で…」
スミレが落ち着いた声で問う。
「これからどうするの？」
「それよね…問題は。日の出まで隠れられればまだ勝ち目はあるんだけど…」
ジョジョもこの戦いの中に光を見出せないでいた。
「でも、そんな暇はないようね」
透明になったまま、ジョジョは両脇の二人の肩に触れた。一気に緊張が走る。
静かに降り続ける雪の中から、枯れ枝を踏む音が聞こえる。ゆっくりと、しかし確実に守屋は三人のいる場所に近づいて来ていた。
ジョジョが言うように『吸血鬼』になっているのなら、守屋の聴覚や嗅覚は人の能力を

軽く超えている。話し声も聞こえていたかもしれないし、三人の体臭も嗅ぎ分けているのかもしれない。
「逃げても無駄みたいね」
ジョジョは立ち上がって守屋を見た。
二〇メートル以上も離れた場所から守屋がじっと見つめている。ジョジョは自分一人だけ『アクトン・B』の能力を解除して姿を現した。
「かくれんぼは終り？」
「以前、そんなこと言ってた馬鹿な男は私に倒されたわ」
「そう、で？」
「その男、かくれんぼが嫌いだったみたい…あんたは？」
「かくれんぼなんて、そんな昔のこと忘れたわ」
「そうね…お互いに最近は色んな事があり過ぎたみたい…でも、アビーのことは忘れない」
ジョジョが守屋へ歩み寄る。
「アビー？　誰？」
「阿部…阿部公和よ」
「…懐かしい名前ね。忘れてたわ」
「忘れさせない。その体に刻み込んでやる」
「どうやって？」
「この拳で…」
「やれるかしら？」
「やってやるわよ」
「…やってみろよ。やれるもんならやってみろよ！」
「守屋ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」
ジョジョの叫び声が雪の降る山に響く。
一〇メートルの距離がありながら、ジョジョの『アクトン・B』はまっすぐに拳を放った。巨大な何かが空気を切る音をさせて守屋へ向かって行く。
『スムース・オペレーター』を身にまとった守屋にそのモノが当たったが、摩擦を消されて後方へと逸れた。
「まだまだまだッ！」
ジョジョが続けて透明になったモノを守屋に放ち続ける。しかし、どれだけのモノが守屋に触れても、すべてが逸れて行った。ジョジョが放ったモノは『アクトン・B』の能力の範囲外へと飛ばされ、次々と姿を現して地面に落下していく。
拳大の石もあれば、鋭く引きちぎられた木の枝もあった。しかし、それは『スタンド』をまとった『吸血鬼』に対してあまりにも非力だった。
「馬鹿にしてるの？」

守屋が苛立っている。
「私は本気よ…あんたも早く本気出しなさいよ」
「お望み通り！」
守屋が一気にジョジョへ向かって来る。
「邪魔だぁ！」
守屋が突然しゃがみ込み地面を叩いた。
「二度も同じ罠にかかると思ってんの？」
守屋が叩いた地面には『W・ストライプ』の帯が張られていた。守屋がその帯を踏んだ時、両足に絡みつくはずだった。
『W・ストライプ』の帯には厚みが無い。守屋に叩かれただけなら問題なかった。しかし、守屋はきっちりと対策を施していた。地面をただ叩いたのではなく、その手には枝が握られていた。
テントを張るペグのように次々と枝を突き挿していく。
ジョジョの後方で保坂が痛みに叫び、その腕からは血が流れ出す。
「もうひとりは何処行ったぁ！」
「ここよ！」
スミレが袋のような物を持って守屋に叫んだ。
袋のようなものはスミレのコートだった。両方の袖を結び、籠のように膨らんだコートの中には、大量の雪が詰まっている。
「くらえッ！」
スミレはコートに包まれた雪の塊を守屋へ振りかぶった。
「こんなもの！」
守屋がそのコートごと雪を払いのけようとした時、スミレの『ハルカリ』が雪を包んだコートの上から守屋を殴りつけた。
一気に熱量の上がった雪は、一瞬のうちに蒸気となって守屋を包み込む。その熱さに守屋が悲鳴を上げる。
「摩擦をどうこうしようったって、熱からは逃げられないでしょ？」
蒸気にまみれた視界の中から『ハルカリ』が殴りかかって来る。
『ハルカリ』の拳は摩擦に関係なく熱を守屋へ伝える。
「クッソぉ！」
摩擦を失くして拳を避けるよりも、その拳を払いのけた方が早いと判断した守屋は『ハルカリ』に向かって攻撃を始めた。
「それで良い」
スミレとは別の方向から声が聞こえると、守屋は右のわき腹に痛みを感じた。
そこには『アクトン・B』の放った石が深々とめり込んでいた。

次々と展開する相手の攻撃に守屋は判断が追い付かない。わき腹の痛みに反応してジョジョの方へと視線を移した時『ハルカリ』がわき腹にめり込んだ石を思いっきり殴りつけ熱を伝えた。

「喰らえぇ！」

焼け石をわき腹に抱えた状態で、守屋の身体は『ハルカリ』の拳に持ち上げられる。

「最初に私の家で会ったときのこと憶えてる？」

守屋を地面に叩き落とし、スミレが訊く。

「守屋さん、気付いてたでしょ？　私には勝てないって」

守屋の目に怒りが見える。

「さっき「私がいないと生きていけないでしょ」って私に言ったわよね？　勘違いしないで、私はね、守りたくなる相手が欲しいのよ。このあいだまでは姉が、そして祖母が守るべき相手だった。姉の名誉や、祖母の存在を守るのが私の役目だった。そしてその次にあなたが私の『守るべき相手』だった。あなたこそ、ひとりでは生きていけないでしょ？　私がいなきゃ、私が守らなきゃ生きていけないのは、守屋さん、あなたよね？」

立ち上がろうとする守屋をスミレが見下ろす。

「守屋さん…あなたを守るのは間違っていた。あなたは守るべき相手じゃないわ。あなたから守らなきゃいけない。あなたは危険すぎる」

「私から…何を守るって言うの？」

守屋はメリメリとわき腹にめり込んだ石を剥がす。

「それは…私自身よ」

「いまさらッ！」

怒りにまかせ、守屋が拳を握る。

「目を覚ましてッ！」

スミレも呼応するように『ハルカリ』のラッシュを繰り出す。

熱を纏った『ハルカリ』の拳を摩擦を消してすり抜けた守屋の『S・オペレーター』は、その拳が『ハルカリ』に触れる瞬間に摩擦係数を上げて殴りつける。

熱によって勢いを削がれながらも『S・オペレーター』は確実に『ハルカリ』を攻め続ける。

また『ハルカリ』も少しずつ熱量を上げ、腕の間をすり抜けようとする『S・オペレーター』の腕を焼く。

二人の戦いの端で、ジョジョは保坂に近寄って傷を見た。

保坂の『W・ストライプ』は地面に貼りつけられたままで、未だに動くことができない。

穴が開いた右腕からは血が流れ出ている。

「大柳君が失った腕を思えば…傷みがあることに感謝しなきゃ」

保坂は無理に笑顔を作った。
「強いわね」
ジョジョは素直に感心する。
その時、ジョジョの携帯電話が震えた。
「…どういうことかしら」
ジョジョは受け取ったメールを見ながらつぶやいた。
「誰から？」
普段なら他人のメールなど気にしない保坂だったが、いまは違う。ジョジョの行動は自分の命運に関わる。
「サトルから…吸血鬼の対処法を思いついたって」
「いつ相談したの？」
守屋が『吸血鬼』になったとわかってから、ジョジョが電話やメールをする時間などなかったはずだった。
「さっき…三人で透明になって話してるとき、同時にサトルへ電話を掛けて会話を聞いてて貰ったの」
「どうして大柳君に？」
「通話記録で一番最初に見えたから…広瀬さんとかにはバレたくないしね」
「それで…対処法って？」
ジョジョは保坂にメールの文面を見せた。
「…よくわかんないけど、とにかくそこへ行くしかないわよね？」
無言で考え込んでしまった保坂にジョジョは声を掛けた。

守屋とスミレの、『S・オペレーター』と『ハルカリ』のラッシュは少しずつ様相を変えていた。一発毎に次を打つまでの間隔が長くなり、反対に『ハルカリ』の熱で爛れた守屋の皮膚が再生される時間は短くなっている。
熱の蓄積が追い付かないうえに、『ハルカリ』に打ち込まれる『S・オペレーター』の攻撃は着実にスミレの体力を奪っていた。
どこか守屋の顔に余裕が見え始めていた。
「どうしたの？　私から自分自身を守るんでしょ？」
守屋が笑う。
必死になって拳を繰り出すスミレに、質問に応える余裕はない。
――熱が消されている…熱が弱くなってる？
スミレの抱く違和感が増す。
――何か知らないあいだにやられている？
ジョジョから『吸血鬼』の体力増加については既に聞いている。しかし、ただのスタミ

ナ切れとは別の違和感が拭えなかった。
「私は確かに守られるべき相手じゃないかもしれない…でも、感謝するわ、スミレさん」
そう言う守屋の身体にはもう傷が見えない。焼けてぼろぼろになった服はそのままだが、そこから覗く肌の輝きは、守屋の言う「絶好調」の輝きだった。
眼の見えないスミレも、交わる拳から守屋の輝きを感じ取っていた。
「私を成長させてくれる…この身体…色々なことができるわ」
守屋の拳は、すでに『ハルカリ』の熱を怖れていなかった。まっすぐに打ち込まれる『S・オペレーター』の拳が『ハルカリ』に重たく打ち込まれる。
「熱が無ければ、あなたのパワーなんてどうってことない」
守屋がどうして熱を怖れないのか、スミレにはわからなかった。実際に熱による爛れもまったく与えられていない。摩擦を失くした『S・オペレーター』には、物理攻撃は通用しない。
「これで…終わりよッ！」
『S・オペレーター』の拳が『ハルカリ』の顔面を捉えた。
『ハルカリ』は真横に吹っ飛び、スミレも同様に倒れ込む。
「とどめだぁッ！」
「させないッ！」
守屋に向かって『W・ストライプ』の左腕が伸びる。
「邪魔するなッつってんだろ！」
守屋は摩擦を消すことなく、真正面から『W・ストライプ』の帯を迎え入れた。
ぐるりと胴体に巻き付いた『W・ストライプ』の帯に動じることなく、守屋は右手で帯を掴んだ。
「ねぇ…これをどうするの？　ほら、身体に巻き付けてどうするの？」
守屋は『W・ストライプ』の帯を手に掴んだまま保坂に近寄る。保坂は思い切り『W・ストライプ』に力を込め、守屋の胴を締め上げた。
「ほら、どうしたの？」
守屋はまったく気にすることもなく近づいて来る。
「なんで…」
「なんでじゃなくて、ほら、もっと力を入れなよ」
とうとう腕を伸ばせば届く位置に守屋は立った。

コツンッ

守屋の額に小さな石が当たった。
「ねぇ、私のこと忘れてない？」

「あんたは後で相手してあげるわ」

コツンッ

ジョジョがもう一つ石を投げ、守屋の顔に当てる。
「そんなに死にたいの？」
「物騒なもの言いね」
「三人同時に掛かって来ても負ける気がしないわ」
「さっきも負ける気がしないって言ってたのに…まだ一人も倒してないわよ？」
ジョジョはゆっくりと屈みこみ、足許の枝を引き抜いた。それは保坂の『W・ストライプ』を昆虫標本のように地面に留めていた枝だった。
すべて引き抜き、保坂がスルリと帯を戻す。
「まぁ正直、あんたに勝てる気はしないんだけど」
「でしょうね」
「それでも…あんたをこのまま街に行かせるわけにはいかない。どんなことをしてでもあんたを倒さなくちゃいけないの」
「へぇ…そんな正義感あるんだ…私はもう街に興味はないし、言っちゃえばあんたたちだって放って置いても良いの。でも付きまとうでしょ？　しつこいのは嫌いなの」
「あらそう。嫌われてるのね。でも、逃がす気はないわ」
「ところで、この会話は何？　時間を引き延ばしてどうしようっていうの？」
「そうね、嫌いな人との会話ってホント嫌よね。私もさっきからムカついてしょうがない」
「じゃあ、さっさと終わらせる？」
「気が合うわね…同属嫌悪って奴かしら？」
ジョジョが大きく息を吸い、神経を集中させる。『アクトン・B』が青い光の粒を舞わせる。
「ジョースター家の力を見せてあげるわ」
青い光の粒が細かく震えだす。
「ジョースター家はね、吸血鬼とは百年前に出逢ってるのよッ！」
『アクトン・B』が右手の人差指と中指を揃える。その周囲に青い光の粒が集まる。

『青（ターコイズブルー）　緑（オーバードライブ）　波紋疾走ッッ！』

「ふざけてんじゃねぇよッ！」

ジョジョの計算は正しかった。
もしもスミレと守屋の殴り合いの後に戦っていたら、守屋はジョジョに対しても摩擦を消して挑んで来ただろう。しかし、守屋は甘く見ていた。確実にスミレよりも強いと確信し、その後の保坂に対しても、まるで虫けらのように見下していた。
そのままでも守屋は摩擦など使わずにパワーだけで勝負しようとしたかもしれない。にもかかわらず、ジョジョはさらに小石を当てるという弱さの象徴のような行いをした。そのことで守屋は自分の力に慢心した。自分より格下の相手に、摩擦を操作する自身の『スタンド能力』を使う必要はない。そう考えた。

『アクトン・B』の右腕と『S・オペレーター』の右腕が交錯する。『アクトン・B』の指先が『S・オペレーター』の胸に触れる。
「オラァッ！」
青い光が『S・オペレーター』の胸元で弾けた。雪で濡れた守屋の胸元から波紋が広がる。
ただの物理攻撃ではない衝撃に守屋は後方へ仰け反った。波紋の衝撃で抉れた胸元を覗きこみ、怒りを爆発させる。
「何してくれんだよぉ！」
『S・オペレーター』のラッシュが始まる。
ジョジョも深く息を吸い込み、拳を握り応戦する。
「オラオラオラオラオラオラオラオラッ！！」
『アクトン・B』と『S・オペレーター』の拳がぶつかり合うたび、青い光が弾ける。
守屋は波紋の衝撃に顔を歪め、ジョジョはパワーの違いに怯んだ。
『S・オペレーター』の拳が胸を突くと、呼吸が乱れ波紋の力が弱まった。それでなくとも、特別な訓練を積んだわけでもないジョジョの波紋は決定力に欠けていた。

§　§

ジョジョは昔、『波紋』をジョセフ・ジョースターから学んだ。
十歳の頃、まだヒステリックに『スタンド能力』を解放して周囲に迷惑を掛けることが多かったジョジョに、ジョセフは『波紋の呼吸法』を学ばせた。
『波紋の呼吸法』は精神を落ち着かせる。恐怖を克服し、肉体を操る『波紋』はヒステリックを起こすジョジョに対して有効だと考えた。
ジョセフ自身は先天的に『波紋の呼吸法』が備わっていたが、ジョジョはそうではない。

一から呼吸法を学び身につけなければならなかった。

ジョセフは長い鍛錬になると考えていた。しかし、呼吸法を学ばせてすぐ、ある変化に気が付いた。

ジョジョが『波紋の呼吸法』を行うとき、その横に立つ『アクトン・B』がうっすらと青く光っていた。ジョセフは『波紋の呼吸法』が確実に『スタンド』に影響していると確信する。実際、『波紋の呼吸法』をしていると『アクトン・B』の動きは精密になり、ジョジョの要求通りの動きをした。

ジョジョ自身は『スタンド』の動きなど気にしなかった。ただ、自分のスタンド『アクトン・B』が青い光を放つのが格好良かった。

青い光を放つ『スタンド』が見たいという欲求が、ジョジョに『波紋の呼吸法』を学ばせた。

ジョセフの『波紋の呼吸法』を学ばせたい意図と、ジョジョの学びたい意欲はすれ違っていたが、結果的に辿り着く場所は同じだった。

『波紋の呼吸法』を学んだジョジョは落ち着きを得て、以前のようにヒステリックに能力を解放することがなくなった。

S S

ジョジョは守屋と対峙しながら、ジョセフ・ジョースターから『波紋の呼吸法』を学んでいた時のことを思い出していた。

――恐怖を自分のものにすること

――『呼吸法矯正マスク』を付けられた時の苦しみに比べれば、痛みなんてどうってことない

――正の波紋と負の波紋

――あの時の方が今より波紋が上手く使いこなせたかもしれないな

――『矯正マスク』を外す時、代わりにメガネを買ってもらったな

――小さな一点から波紋エネルギーを解放する

――「メガネは心のスイッチだ。青色はお前にとって精神を落ち着かせる。『スタンド』を使わない時は、このメガネの青いフレームがお前の心を落ち着かせてくれる」

「クッソ…」

――『波紋の呼吸法』の鍛錬を怠けてた罰かな…

徐々に守屋のパワーが上回って行く。

呼吸を乱す頻度が高くなり、波紋の力も弱まっていた。

「スタミナ切れ？」

守屋の余裕のある声が響く。
ジョジョはその声を無視して拳を握る。
「最初の勢いはどこ行ったの？」
守屋は一つ呼吸を置くと、更にラッシュのスピードを上げた。
『アクトン・B』が一発放つあいだに『S・オペレーター』は二発。
その差は歴然だった。
「ジョースター家を…舐めるなよ」
「何だってぇ？」
守屋の強さは圧倒的だった。
気が付けば『アクトン・B』の両腕を『S・オペレーター』が掴んでいる。
「ジョースター家が何だって？」

ジョジョの姿を見ていた保坂が涙を流していた。なぜ泣いているのか自分でもわかっていない。なぜか助けに行けなかった。まったく歯が立たなかった守屋に対して、どうすればいいのかわからなかった。
自分よりも戦いに慣れ、『スタンド』の扱いも上のジョジョが守屋に押されているのが信じられなかった。

両腕を掴まれた『アクトン・B』に守屋が囁く。
「ジョースター家が何だって言うの？　家系がどうしたっていうのよ。守屋毬子を、舐めんじゃないわよ」
『S・オペレーター』を纏った守屋が、思いきり『アクトン・B』の胸を蹴りつけた。
力なく倒れ込むジョジョを守屋が見下ろす。
「最初に死ぬのはあんたよ」
守屋は右手を伸ばすと、ジョジョの胸に触れた。
「ちょっと試したいことがあるのよ…さっきね、スミレさんと戦ってるときは何となくできたんだけどね。あんたの身体で確認させてもらうわ」

保坂は何が起こっているのかわからなかった。ジョジョ自身も、自分の身体が何をされているのかわからなかった。ただ、守屋が笑っているのだけが見えた。
守屋の触れたジョジョの胸が、硬く凍りついて行く。

ジョジョの意識はすぐに切れた。

「そうね…気化冷凍って言えばいいかな」

守屋はジョジョの胸元から水分と同時に熱を奪い去り、瞬く間にジョジョの胸元を凍らせた。
守屋は満足そうにジョジョを見下ろす。ジョジョの波紋で抉られた自分の胸は再生されていない。その傷をさする。
「あんたも同じ場所を抉ってあげるわ」

保坂は無我夢中で走り出していた。ジョジョの身体に何が起こったのかわからなかったが、守屋の表情から『起こってはいけない何か』が行われる恐怖を感じ取った。
理屈ではなく、ただその『何か』を阻止するために走り出した。
保坂は『スタンド』を出す余裕もなく、全身を使って守屋に体当たりした。不意のことによろめいた守屋が、無表情で保坂を見る。
「あんたも、邪魔しかできないの？」
守屋は保坂の首を掴むと、その勢いのまま放り投げた。
後方の木に全身を打ち付けた保坂は、咳き込みながらもジョジョに声を掛ける。
「起きて！ジョジョッ！」

守屋は倒れているジョジョに向き直る。
保坂からは守屋が邪魔でジョジョの姿が見えない。
「ジョジョォ！！」

守屋が右腕を大きく振り上げ、ジョジョ目掛けてまっすぐに撃ち下ろした。

守屋の腕から血が滴る。その血は、凍っているジョジョの胸に落ちている。

「あなたは守られなきゃいけないの…」
スミレの声だった。
スミレは『ハルカリ』の右手をジョジョの胸に当てると、凍っていた部分を一気に溶かし始めた。
「あなたはまだ死んじゃダメなのよ」
スミレがジョジョの胸を叩いた。
「なんで、なんでこんな女のことを守るのよ」
守屋が震えた声で言う。
保坂は何が起こっているのかわからなかった。時が止まったように守屋は動かない。

ジョジョと守屋の間に入ったスミレがどうなっているのかもわからなかった。
うっすらとジョジョの声が聞こえた時、保坂は再び泣きそうになった。

「スミレ…さん？」
ジョジョが目を開けると、スミレの顔が間近にあった。
ゆっくりと視線を動かし、スミレの顔から首、胸、そして腹部を見ると、真っ赤な血に染まった『S・オペレーター』の腕が見えた。
「良かった…」
スミレは力なく微笑む。
ジョジョを目掛けて振り下ろされた『S・オペレーター』の拳は、二人のあいだに走り込んで来たスミレに直撃していた。
ズブリと『S・オペレーター』の腕がスミレの腹部から引き抜かれる。
大量の血を流しながら、スミレはジョジョの上に覆いかぶさった。
ジョジョは守屋のことを無視してスミレに声を掛けた。
「なんで…どうして？」
「なんでだろうね…このあいだはあなたと戦ってたのにね…」
スミレの声が消えかけている。ジョジョの身体に感じるスミレの重みからも力が抜けて行くのがわかる。
「すぐ助ける…もう少し待ってて」
「良いの…これじゃあたぶん助からない。でも良いの…「少女に抱擁を」ってあなたのことだったのかな」
「違う…あなたはまだ死なない。もっと長く生きて穏やかな死を迎えるはずなの」
「いま、とても穏やかよ」
ジョジョは上体を起こし、スミレを仰向けに寝かせた。
「必ず助ける」
スミレは応えず、ただ笑っていた。

「逃げて」

まるで耳元で囁かれたようにはっきりとしたスミレの声がジョジョに聞こえた。
「何？」
足許に横たわるスミレは先ほどと同じように微笑んだまま動かない。

「逃げて」

もう一度聞こえた。そしてジョジョはスミレの身体から湯気が出ているのに気が付いた。
――何が起こってるの？

ジョジョはうっすらと『ハルカリ』が見えた気がした。
グッと足に力を込め、その場から走り出す。
「保坂さん！走ってぇ！」
目の前の守屋を避け、保坂の元へと走る。立ち上がろうとしている保坂の腕を引っ張り上げた。
「スミレさんは？」
「いいから！早くッ！」
あまりの勢いに保坂は言い返すこともできずジョジョを追いかける。
ジョジョは走りながらスミレの方を振り向いた。まだ守屋はスミレの側に立っている。
その時、スミレを中心にして爆発するように熱風が広がった。
空から降り注ぐ雪も熱風に煽られ水滴になって飛ばされる。
周囲の木々も一斉に揺れ、枝の上に積もっていた雪も吹き飛ばされた。
熱の塊は走り続けるジョジョと保坂にも追いつき、身体が熱風に包まれる。
『ハルカリ』の最後の一撃が辺り一帯を揺らした。
ジョジョと保坂は一心不乱に斜面を駆け上がる。
振り返ることも出来ないまま、ただひたすらに走った。
「あの場所にいたら、守屋だって…」
熱風が去り、空中には雪と雨が入り混じっている。
バラバラと大粒の雨がすべて落ちると、再び雪だけの降り注ぐ空に戻った。
ジョジョがやっと後ろを振り返った。
随分走ったように思ったが、斜面を見下ろすとさっきまで戦っていた場所が見える。
しかし木々に阻まれてスミレと守屋の姿は見えなかった。
スミレの身体を中心に広がった熱風は周囲の雪を溶かし、上から見下ろすときれいな円を描くように、木々に積もっていた雪を消し去っていた。
白い世界にぽっかりと黒い穴が開いていた。

「スミレさんは…」
保坂が呟いた。
「大丈夫…『ラヂヲ・ヘッド』の予知能力じゃ、もっと長生きするはずだから」
「でも…こんな最期だったら、ジョジョの前で本当のことは」
「うるさいッ！最期じゃないッ！」
保坂は口をつぐんだ。

「大声を出してごめん。…ただ、いまは彼女のことは考えられない。まだ気を緩めるべきじゃないわ」
「どういうこと？」
「守屋よ…」
「でも、あの場所にいて助かるなんてこと」
『吸血鬼』はそんなに甘くないわ…」
ジョジョと保坂はやっと森を抜け、山の中腹を通る道路へと出た。この道を下れば二人が通っている高校へと着く。
しかし、この異様な世界が現実の高校と繋がっているとは思えなかった。
二人は道の端に腰を下ろす。
「どうせ見つかるなら、それまで少しでも休んだ方が良い」
ジョジョは長くため息をついた。
「雪も止んだね」
保坂が呟いた。

ss ss

「休んでるとこ悪いけど、目的地はすぐそこなんだ」
街灯のない暗い道でジョジョと保坂に声を掛ける者がいた。
「大柳くん！」
保坂はその声の主を見て名前を呼んだ。そこにはなぜか傷だらけの大柳悟がいた。
「なんなの、その傷は」
「いや、自転車に乗って来たんだけど、片腕だと難しいね。この雪だし」
ジョジョは呆れたように笑った。
「それはお疲れね。で、そこへ行ってどうするの？」
ジョジョは立ち上がり、足に付いた土を払いながら訊いた。
「弱点は『太陽の光』って言ってたからね。それを浴びせるんだよ…そのためには少し準備が必要だけど」
少し改まり、大柳悟は訊いた。
「ところで、電話だともうひとりの声が聞こえたんだけど」
ジョジョは長く息を吐き、歩き出しながら『円谷スミレ』について話した。
「そう…で、守屋は？」
「わからないけど…それほど長い時間はかからずにこっちにやって来ると思う」
大柳悟はジョジョと保坂に目で合図すると、足早に先へ向かった。姿ははっきり見えなかったが、先にいる誰かに声を掛けていた。

追いかけるように保坂が走り出し、ジョジョはその後ろでゆっくりと空を見上げた。上空で雲が動いている。

ss ss

熱さで溶けた皮膚が再生される。
守屋は自分の身体をぼうっと見つめていた。
服はボロボロに焼け爛れており、すべて脱ぎ捨てていた。
雪は止み、風も弱く、見える世界に大きな音はない。じっと耳を澄ますと、皮膚が再生されてゆく音が聞こえた。
なぜスミレが最期になって自分以外を守ったのか、理解できずにいた。スミレに言われた通り、スミレに自分が必要なのではなく、自分にはスミレが必要だったのだと、いま理解する。
ひとりで生きて行くと豪語したあと、家を出て精神科医の『澤』(スタンド『ホワイト・ルーム』)の所で世話になり、その場へ帰れなくなると、『澤』と入れ替わるように『円谷スミレ』が手を差し伸べてくれた。
結局は誰かを頼って生きていた。『ひとりで生きて行く』など出来ていなかった。
――それも、今日までの話。
まだまだ時間はかかりそうだったが、着実に皮膚は元通りになっている。雪は止んだとはいえ、決して温かいわけではないいが、寒さを感じずに立っていられる。
――ひとりで生きて行ける。
もう一度、守屋は心に決めた。

再生すべき場所も残り僅かとなったとき、胸の窪みに気が付いた。あの女に抉られた胸がまだ鈍い痛みを残している。
『ひとりで生きて行く』という決心に、何か引っかかるものがあった。進みゆく道に、邪魔な壁があった。
青く光るその壁を壊さなければ、真っ直ぐ進むことができないような気がした。
胸の窪みを右腕でさする。
ふとその右腕を見ると、皮膚は再生出来ているのに血が滲んでいるのに気が付いた。それは自身の血ではなく、スミレの血だった。スミレの腹を貫いたときの血がまだ腕にこびりついている。
右手に付いたその血に意識を集中させると、ジワリと皮膚の下に浸透してくる味がし、何とも言えない力が漲って来るのがわかった。空腹に伴う苛立ちのようなモノが消えた。
右手に残っている血を胸に擦りつけると、次第に窪みに潜んでいた鈍い痛みが消えて行

った。
誰にも聞こえなかったが、守屋毬子は笑っている。
少し離れた木の枝に、スミレのコートが引っ掛かっていた。守屋はそれを手に取り、ゆったりと羽織る。
守屋はコートの上から完治した胸を触った。
「私は、人間を止めたのよ…」

「あんたが邪魔なのよッ！」
守屋は大声を上げた。
まだ周囲は木々に囲まれているが、微かな話し声、ジョジョや保坂の血の匂い、砂利を弾く足音はしっかりと守屋に聴こえ、その方角も距離もわかっていた。
しっかりとした足取りで、守屋は一歩一歩近づいて行く。
「あらそう…こっちもあんたが邪魔なのよ」
守屋の耳に憎らしい声が聞こえた。
「跡形もなくこの世から消し去ってやる」
「言葉遣いまで『吸血鬼』らしくなって…適応力あり過ぎよ」
守屋は木々の暗闇から姿を現した。
この寒空の下、コートを一枚羽織っただけの姿でアスファルトの上に立つ。その顔は笑っている。
「死ぬ覚悟はできてる？」
「それはこっちの台詞」
守屋は『S・オペレーター』を身に纏うと、一気にジョジョへ向かって走り出した。
ジョジョも『アクトン・B』を出して身構える。
守屋の眼にはジョジョの他に二人の姿も映っていたが、まったく気にしなかった。
一人は力の差が歴然としていて負ける気などしなかったし、もうひとりは光りのない世界では無力だと知っていた。ジョジョさえ倒すことができればそれで良かった。
そして、目の前のジョジョに対しても、一発拳を当てれば勝利が目の前だとわかっていた。
その守屋の（『S・オペレーター』を身に纏った）拳は、『アクトン・B』が構えた腕の隙間、胸に向かって一直線に進む。
「喰らえッ！」
『アクトン・B』は『S・オペレーター』の拳を掌底で撥ね退けようとしても、消された摩擦によって空を切るだけだった。
守屋の思惑通り、真っ直ぐに伸ばした腕はジョジョの胸へ届き、その肺を押しつぶした。
一瞬にして『アクトン・B』から青い光が消える。
「呼吸…でしょ？」
ジョジョは冷静さを失った。
「呼吸を止めれば…その変な力も弱まるんでしょ？」
『波紋の呼吸法』をもっと鍛え上げていれば、これほど簡単に止められることはなかっただろうとジョジョは後悔した。

「もう一度訊くわ…死ぬ覚悟は出来てるのよね？」
ジョジョは声が出ない。
「守屋ぁッ！」
守屋の視界の端に動く者が見えた。大柳悟が『スタンド』を出して守屋に迫って来る。
「だから…邪魔なのよ」
守屋に敵はいなかった。地面を軽く叩き摩擦を消した。踏み出した足は地面を捉えられなくなり、クルクルと無様に転がるしかない。
体勢を崩した相手を、守屋は路傍の石でも蹴るように扱った。
大柳悟は何もできずに守屋に軽くあしらわれた。
守屋は視線を移し、目の前にうずくまるジョジョへと無言で拳を打ちこんだ。
「まったく怖くない。怯えて暮らす必要がなくなったの」
もう一発、今度は腹を抉るように蹴りを入れた。
「このまま放っておいても良い…だけど、あんたは許せない。あんただけはこの手できっちりと葬ってやる」
もう一発、手加減なしの蹴りが放たれる。
鈍い音と供にジョジョが咳き込み、体を捩じらせた。
「あんたを…追い込む…」
ジョジョが地面を這いずりながらしゃべり始めた。
「何？」
「あんたは、追い込まれてるの…」
ジョジョが何を言っているのか、守屋にはわからなかった。
「正直、勝てる相手じゃないのは知ってる」
背中を見せてうずくまっているジョジョに対して、守屋は無表情に蹴りを入れた。
「何を言ってるの？　追い込まれて頭おかしくなったの？　最初から私には勝てないのよ」
「一対一じゃ負けるわ」
「相手が多くても同じ。…私は…この『S・オペレーター』は誰にも捉えられないわ」
「生憎ね…」
ジョジョが膝を立て、静かに立ち上がろうとすると、守屋はその場の地面に触れた。
「あんたはこの摩擦の消えた世界で、一生立ち上がれないまま、私に殺されるのよ」
「…ありがとう。これで先に行けるわ」
ジョジョの身体がふっと滑り出し、守屋との距離を更に広げた。
「あの女ね…」
保坂のスタンド『W・ストライプ』の帯がジョジョに巻きついているのだろうと守屋は思った。帯を透明にして、ジョジョの身体をこの状況から引き離そうとしているのだとわかった。

「あんたは逃がさない」
「あらそう…私が逃げてると思った？」
ジョジョが不敵な笑みを浮かべる。
「人の話はちゃんと聞くものよ…あんたは追い込まれてるの」
地面の摩擦はまだ消えていて、ジョジョはしっかりと立つことができない。見えない帯にすがるようにして身体を支えているジョジョを見据え、守屋は足を進める。
ジョジョに最期の一撃を加えるため、その拳に力を込めた。
「捕まえたわ…」
ジョジョが呟いた。
「私を捕まえることなんてッ！」
叫び声と同時に守屋が力強く足を踏み出した。
「絶対にできないッ！」
握った拳をジョジョに向かって突き出した瞬間、守屋は腕に違和感を覚えた。
「何？」
「あんたはもう、そこから出られないのよ」
もう一度守屋は殴りかかった。
しかし、ある線を越えた途端、突き出した拳が動かなくなる。動かない拳を見ると、不思議な光沢が見える。
「これは？」
守屋の腕は鉛色に固まっている。ネジのようなモノまで皮膚にめり込んでいる。
「なんなの？」
「あんたはね、閉じ込められたのよ…この『鉄塔』に」
ジョジョは『アクトン・B』の腕を伸ばし『何か』に触れた。
いままで透明にされていた巨大な『鉄塔』が姿を現す。
それは、いつだったかジョジョが見に行きたいと願った『鉄塔』だった。
何年ものあいだ男が一人で暮らしている『鉄塔』の下に守屋は入っていた。

――そう言えば…
ジョジョは、この『鉄塔』を見に行こうとしていた途中で『アビー』と初めて出会ったことを思い出す。

「こんなものッ！こうしてくれる！」
「止めた方が良いわよ」
ジョジョの忠告など無視して、守屋は『鉄塔』に一撃を放った。
大きな音はしたが『鉄塔』はビクともしない。

その代わり、巨大な鉄の軋む音が『鉄塔』を巡りだした。守屋がその音に耳を澄ますと、さっき殴った場所に集まって来るのがわかった。
守屋が危険を感じるのと同時に、目の前の鉄柱が盛り上がり、守屋の『S・オペレーター』をそのまま再現した『鉄塔』が守屋を殴り返してきた。
防御の間に合わなかった守屋は、自身の一撃をまともに浴びる。
「だから、人の話は聞かないと…」
動転した守屋は能力を解除してしまい、ジョジョはやっと自分の足で立ち上がった。

「あなたに説明してあげるわ」
ジョジョは守屋に近づいた。
「この『鉄塔』はね…本体を閉じ込めるのよ」
ジョジョは上を指さした。その先に、電線にぶら下がっているひとりの男がいた。
「わたしも初めてだからビックリしてるけど…彼がこの『スタンド』の『前本体』よ。そしてあなたが『現本体』…この『鉄塔』の『能力』は『本体を外に出さない』こと。わかる？」
守屋はさっぱり理解できなかった。
「まぁ、あんたがわかってようが関係ないんだけどね。一応、あんんたがどうやって死ぬかを教えてあげるわ」

ジョジョは守屋に説明して聞かせた。
『鉄塔』の外に出ようとすると『鉄塔と同化』してしまうこと。『鉄塔』に当たる物理攻撃は、そっくりそのまま返って来ること。
そしてそれは、摩擦を消そうがどうしようが、守屋は決して外に出られないということ。

それを聞いた守屋が理解しているのかしていないのか、表情からは何も読みとれない。
「そう…でも、『前本体』が上にいるってことは、私がここに入る直前までは彼が閉じ込められてたのよね…ってことは、もしあんたをここに引きずり込めば…」
「さすが、すぐに解決策を見つけるなんて頭が良いわ…でもね、私たちはそれくらい予想してる。あんたはもう出られないの。そう簡単に私たちも掴まらないわ」
守屋は笑っている。
「私の能力は摩擦を消すことよ？」
「それがどうしたの？　その『鉄塔』に対しては、まったく意味をなさないわ」
「そう『鉄塔』にはね…でも地面はどうなの？　摩擦を失くして、あんたたち誰か一人でもこっちに引き摺り入れてやるッ！」
『S・オペレーター』の拳が地面に叩き込まれた。

「だから、そう簡単にいかないのよ…ほんと、人の話を聞きなさいよ」
摩擦がなくなったはずの地面の上で、ジョジョは変わりなく立っている。
「どうして？」
「一対一なら、本当に負けてたと思う」
ジョジョは振り返って保坂を見た。
『W・ストライプ』は力は弱いけど、それを補うほど保坂さんは機転が利く。『W・ストライプ』の利点を知りつくしてるわ」
守屋はジョジョの立っている地面を見た。そこには『W・ストライプ』のまっ白な帯が敷かれている。地面の摩擦が無くなろうとも『W・ストライプ』の上では関係が無い。
「サトルも…サトルがいなければ『鉄塔』のことなんて知らないままだった」
「入院中、広瀬さんや丈助さんに色々聞けたからね」

守屋にはジョジョ達の会話など耳に入って来なかった。ここからどうやって抜け出せるのか、ずっと考えている。
その守屋を見つめ、ジョジョが言った。
「あんたにはもう一つ、重要なことを伝えておくわ」
ジョジョの表情が変わる。
『吸血鬼』になったあんたは、『太陽の光』にあたると、粉々になって消え去るわ」
守屋は理解しかねている。
「教えてほしいの、あの坑道の奥で、誰に会って、どうして『石仮面』をはめられたの」
守屋は答えない。
「重要なことなの…どうして『石仮面』がこの場所にあるの？」
守屋は笑った。
「言わないわ」
最後の抗いだった。
「言いなさい」
「どうして言わなきゃいけないの？　あんたの言うとおり、もし私が『太陽の光』で死ぬとして、あんたたちの為になるようなことを最後に言っても面白くない。それに『太陽の光』にあたっても死なないかもしれないじゃない？　そうしたら、私はここでゆっくりと外に出る方法を考えれば良い…私を脅そうとしても無駄。私は絶対にこの場所から抜け出してやる」
守屋の言うとおりだった。
ジョジョの『吸血鬼』の知識は、経験ではなくただ人から聞いただけの情報だった。
「そう…」

ジョジョは潔く諦めた。
「確かに…『太陽の光』では死なないかもしれない。でも、私たちよりはるかに高い確率で『太陽の光で死ぬ』可能性の中にあんたはいる」
ジョジョは深くため息をつく。
「一つ残念なのは、あんたの身体に『アビー』の思いを刻みつけられないってこと。この手で、最後の一撃を与えたかった」
「与えれば良いじゃない」
「そんな馬鹿みたいな挑発にのるわけないでしょ。この期に及んであんたに近づこうなんて微塵も思わない。あんたは最後『太陽の光』の恐怖に怯えながら情けなく死んでいくのよ」
ジョジョの声には何の感情も込められていなかった。守屋はその抑揚のない声を僅かに恐れた。
「あんたから何か聞き出そうなんてもう考えない。その代わり、あんたがどれだけ命乞いしても、もう決して助けない」
ジョジョはそれだけ言うと、その場に腰を下ろした。
静かに『鉄塔』の中の守屋を見つめた。

ss ss

何分経っただろうか、ジョジョは『鉄塔』の上空を流れる雲を見ている。
――なんであの人は『鉄塔』に掛かる電線で遊んでいるんだろう？
先ほどから暇を持て余したように『鉄塔男』は電線を行ったり来たりしていた。
――やっぱり、いくらスタンドとはいえ『鉄塔』に住み続けられるのだから、ちょっと変わっているんだ。いろいろ訊いてみたい。
何の気なしに、ジョジョは思いを巡らせていた。『鉄塔』と『鉄塔男』と、その上を流れる雲を見つめながら、時間が過ぎるのを待った。
電線の上で遊んでいた『鉄塔男』は、ジョジョに見られているのに気づいていた。だから、その視線が東の空に向くように合図を送った。

ss ss

「さぁ、時間よ」
流れる雲の隙間に、僅かに白み始めた空が見えた。
「思い残すことがあろうとなかろうと、太陽が昇るわ」
守屋は無言だった。『鉄塔』の下でうずくまり、膝の間に顔を入れている。

「最後に何か言い残したいことある？」
それでも守屋は何も言わなかった。
ジョジョはゆっくりと東の空に顔を向け、その目を細めた。

「ああああああぁぁぁぁああぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁあああああああぁぁあ！！！！」

一筋の光が守屋の肌に触れた途端、守屋は立ちあがってジョジョに向かって叫んだ。両方の拳を握りしめ『鉄塔』の外に立つジョジョに襲いかかる。
いくら『鉄塔』の外に出れば『鉄塔と同化』するとわかっていても、守屋の豹変にジョジョは一歩たじろいだ。
その後ろで見ていた大柳悟は、瞬時に『インビジブル・タッチ』を繰り出し、地面に現れた守屋の影をその場に定着させた。
「ありがとう、サトル…大丈夫よ」
ジョジョはグッと全身に力を入れ、気持ちを落ち着かせた。
目の前には『鉄塔と同化』して動きを止めた鉛色の守屋がいる。それは『いる』と言うよりも、彫像のように『ある』と言った方が適切な姿だった。
鬼のような形相のまま動きを止めた守屋に、ジョジョは軽く触れた。
「確かに『太陽の光』にあたって死んでしまうより、こうやって『鉄塔と同化』してしまえば生きながらえるかもね…悪あがきにしても、結果としては死んでいないのだから正解かもしれない。それでも、私がいる限り生きることなんて許さない」
ジョジョは呼吸を整え、『アクトン・B』を出現させる。
「でも最後に、感謝しなきゃね。あんたに『アビー』の思いを刻みこむことができるんだから」

「これは…『アビー』からの一撃よ」
『アクトン・B』から青い光の粉が舞う。太陽に照らされ、音が聞こえるほどに煌めき、その光の粉が右拳に集まって行く。
大きく踏み込まれた左足、力強く捻られた腰、背後へと引かれる左の肘の動きに合わせて勢いよく右の肩が前へと押し出される。

『銀色の波紋疾走（メタルシルバーオーバードライブ）ッッ！』

すべての力を集約して、光を纏う『アクトン・B』の右拳が守屋に打ち込まれた。

重く鋭い音が鳴り響き、守屋の身体が一気に『鉄塔』の下へと戻される。
その瞬間に『鉄塔と同化』していた守屋の身体は元に戻り『太陽の光』が浴びせられた。
「イヤアアアアァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
『波紋』のエネルギーと、突き刺すような『太陽の光』で守屋の身体が粉々に崩れ始めた。

§ §

病院から無断で外出していた大柳悟と、戦いで負傷した保坂和子はともに病院へ向かっていた。
ジョジョはもう少しここにいたいと、『鉄塔』の足許に佇んでいる。
守屋毬子が塵になってから、一時間が経っていた。
「餅…食べる？」
鉄塔から声が聞こえた。
「ねぇ…彼女が塵になって『鉄塔』の本体はいなくなったのに、どうしてまた『鉄塔』の中に入ってるの？」
「家だからね」
『鉄塔男』は焼けたばかりの餅をジョジョに差し出しながら答えた。
ジョジョは差し出された餅を受け取り、笑った。
「ごめんなさい…あなたの『スタンド』を殺人に使ってしまって」
「気にすることはない。この『スタンド』はもともと自由にできる物じゃないし、それにあれは『人』じゃなかったんだろ？」
「そうね…それで、もし知っていることがあったら教えてほしいんだけど」
ジョジョは自分の指を見つめた。まだ時折、粉々になった守屋の欠片が付いているような気がしていた。
「あの…祠のあった場所についてなんだけど」
『鉄塔男』は何も言わずにジョジョの言葉を待っている。
「あの奥に誰がいるか…何か知っていることは？」
「半年くらい前かな」
『鉄塔男』は自分の分の餅を食べながら答えた。
「同じように訊いてきた男がいた…そん時にも答えたけど、祠があったことなんて知らなかったんだ。ただ、その男の指さした場所に何かあるってことはわかってた」
「その男って誰？」
「さあ、名前も訊かなかった…何か調べ物してるって言ってたな。本当か嘘かは知らないが」
ジョジョは小さな声で「ごちそうさま」と言った。
「その餅ね、美味しかったろ？　そうそう、でその男が訪ねてくる前に、あの場所が騒がしかったんだ。色んな人間が行き来しててね。何か運び出してたり、ボーリングっていうの？　あの、地面を掘って行く奴。あんな斜面だから機械はそんな大きくなかったけど、二、三日掘り続けてたんだ」
『鉄塔男』は新しく餅を焼き始めている。香ばしい匂いに誘われてか、鳥が一羽鉄塔にと

まっている。
「男が訊きに来てから…どれくらいだったかな。コンクリ流し込んでるのは見えたけど、それ以降ぱったり人が来なくなった」
ジョジョは二つ目の餅を受け取った。どうしても守屋を殴った右手ではなく、左手で受け取ってしまう。
「そうだ…その訪ねて来た男は『スタンド使い』だった」
「どうしてわかったの？」
「自分で訊いて来たんだ「これが見えるか？」って、自分の『スタンド』を見せて」
「無謀なことするのね」
「あぁ、だから『スタンド』について忠告してやったよ」
『鉄塔男』は新しく餅を焼くか、ジョジョにジェスチャーで尋ねた。
ジョジョが首を振る。
「あそこから何か持ち出してたって言ったけど、それは…」
「でかい箱だったな」
「石棺かしら…」
「え？　セッカン？」
「そう、あそこには石棺があったって」
「それは無いね。確かに、大きさはそれなりだったし最初は何人かで運び出してたけど、その後で男がひとりで担いで戻してたんだ。中身を取り出したからって、石棺をひとりじゃ無理だろ」
「でも、あの中には石棺だけがあったって」
「機械を使ってるようにも見えなかったけどな。それか相当な力持ちか」
ジョジョは『鉄塔男』から視線を外し、空を眺めた。
「気になるわね」
ジョジョは広瀬康一か『ＳＰＷ財団』か、どちらに訊けばいいのかを考えていた。
『鉄塔男』は三つめの餅を食べ終えると、両腕を上げて背筋を伸ばした。
「色々ありがとう…お餅も美味しかったわ」
「いや構わないよ。ちょっと早起きし過ぎたから、またひと眠りするよ」
「起こしちゃってごめんなさいね…でも本当に助かったわ」
「…あーお礼も嬉しいけど、良ければ今度『海苔』を持って来てくれないかな」
「ノリ？」
「餅に巻くんだ。醤油は貰ったのがあるから、海苔があると完璧なんだよ」
「わかったわ。海苔ね。覚えとく」
「頼むよ」
ジョジョは小さく手を振り歩き出した。

ジョジョは携帯電話を取り出し、アドレス帳から目的の名前を見つけ出してボタンを押した。

「hello,Mr Kite」

ジョジョが電話を掛けた先は、すでに昼を過ぎている。

――えぇっと、日本だと…随分早起きだね、ジョジョ。直接電話を掛けて来るなんて珍しい。

「そうね『財団』に直接はしづらい内容なの…少しだけ力を貸してほしいのよ」

――お嬢様の為なら。

電話の相手は、ジョジョが幼い時からずっと身の回りの世話をしてくれた元『ＳＰＷ財団』の職員だった。

「この夏、『財団』がこっちで色々調べてた時に不審な事故があったはずなの…」

――それは人が死んでるような？

「たぶんね。その時に何があったのか、なるべく詳しく」

――わかった、非公式なものが必要なんだね？

「それともう一つ」

ジョジョは短く息を吐いた。

「『呼吸法矯正マスク』を送って欲しいの」

――それは…『波紋』のかい？

「えぇ、懐かしいでしょ？」

――ジョジョ、君は何に巻き込まれてるんだ？

「…そうね、もう巻き込まれてるのよね。私も驚いてる」

――私がそっちに行こうか？

「ありがとう。気持ちだけで良いわ。『ＳＰＷ財団』との兼ね合いもあるでしょ？　こっちは大丈夫。私はジョセフ・ジョースターの娘よ」

――うーん…余計心配だな。

ジョジョは笑いながら「『事故について』と『マスク』をよろしくね」と言って電話を切った。

意識的に呼吸を整え、拳に意識を集中させると青い光が舞った。

「私は『ジョースター家』のひとりなの」

~S.Joester moves in mysterious ways~ to be continued